

芸術さろん@てらまちIV

近世上町台地の風景と文芸

西鶴と参詣で賑わう四天王寺界隈景観



開催報告

上町台地の歴史と美をめぐる知の再発見シリーズ

日時 2025年4月11日(金) 18:00～20:00

場所 和宗総本山四天王寺 本坊安養殿

主催 上町台地アートプロジェクト実行委員会
(事務局・一般財団法人 大阪地域振興調査会)

上町台地芸術サロン@てらまち第4回 開催記録

Report of the 4rd Art Salon@Teramachi



日 時：2025年4月11日(金) 18:00～20:00

場 所：和宗総本山四天王寺(本坊安養殿)

Venue: Grand head temple SHITENNOJI temple

テ マ：近世上町台地の風景と文芸―西鶴と参詣で賑わう四天王寺界限風景―

Theme: Scenery and Literature of the Early Modern Uemachi Hills

司 会：宮尾展子 (弊財団評議員、株式会社ダン計画研究所代表)

来賓挨拶：近鉄グループホールディングス株式会社 取締役相談役

(略)

(代読) 取締役専務執行役員

サントリーホールディングス株式会社

副会長

(代読) 大阪秘書室部長

小林 哲也

林 信

鳥井 信吾

丸山 正樹

元禄時代の経済社会と文芸について

Introductory Talk:

Economic Society and Literature in the Edo Genroku Period

宇澤 俊記

Shunki Uzawa

(心学明誠舎理事、当財団評議員)



『日本永代蔵』は日本初のビジネス書です。
井原西鶴(1642-1693)が数えの47歳、元禄元年
(1688年)。幕末に至るまで幾度となく再販さ

れ、ロングセラーとなりました。

1634年には3代将軍家光が上洛して新大坂城
を視察し、大坂町人に地子銀(固定資産税)に相

当)を免除する触れを出しました。

日本海側から海路、大坂に米が届くのは1639年のことです。加賀藩は従来、若狭湾から琵琶湖を経由して大坂に蔵米を送っていましたが、初めて瀬戸内海を通して加賀から大阪へ100石の米を送ることに成功します。これが北前船の先駆けです。1672年には河村瑞賢が幕府の指示を受けて天領だった出羽の米を大坂まで効率良く大量輸送するため、西回りの北前船の航路を開発しました。

1600年代に日本全体で人口爆発が起こります。天下分け目の関ヶ原が1600年で、日本の人口はざっくりと1200万人、それが1700年、元禄の頃になると2769万人と100年間で2倍以上に膨れ上がります。

江戸時代前期の代表的な大坂の人物は淀屋常安(1560? -1622)です。常安は大阪に出てきて北浜あたりで「淀屋」と称して吉野杉や木曾檜をあつかう材木商を開きます。家康から望みのものはないかと問われ、「諸国から大阪に入る干魚の品質に応じて市価を定める独占権と干魚の運上銀を欲しい。米穀の相場を自分一手で立てたい」と願い出て許可を得たと言われます。淀屋の最盛期は4代目の重当(1634-1697)のころです。井原西鶴は『日本永代蔵』で「北浜の米市は、日本第一の津なればこそ、一刻の間に五万貫目のたてり商いもあることなり」と描写しています。

元禄時代の後半、バブルがはじけ、幕府は深刻な財政難に陥ります。1705年(宝永2年)、5代目・広当のとき、幕府は豪奢の罪により淀屋を闕所処分にして取り潰します。淀屋が幕府に召し上げられた資産は諸説ありますが、土地

が北浜に2万坪、伏見、和泉、八幡などに400町歩、家屋敷1万坪、米蔵など730戸、材木2千貫、千石船150隻、屏風や鉾産物、美術品、刀剣、薬種など、現在の価格に直すと100兆円ともいわれています。これで幕府の財政難は一息つき、諸大名は借金が帳消しになりました。門閥的特権商人の終焉でした。

大坂の繁栄はどこから生まれたのか。当時、大坂に95の蔵屋敷があり、中之島周辺に85が集まっていたといわれています。変動する米価のリスクを回避するため、青田買いにあたる先物取引(帳合米取引と呼んだ)が発達します。「先物取引は日本で発明された。シカゴ商品取引所よりも120年近く前のことである」と話しています。

商業都市・大坂の代表格は銅精錬の住友です。『日本永代蔵』には「銅山にかかりて、俄か分限(金持ち)になるも有り」と書かれています。住友は二代目・友似(1607-1662)のときに京都から大阪に移ります。1691年に別子銅山が開坑して、17世紀末の日本の産銅高は6000トンに達し、世界一となります。この4分の1を別子銅山が占め、大阪で精錬して製品化、長崎からオランダ、中国をへてインド、ヨーロッパまで輸出されました。それが幕府の重要な資金になっていったのです。

金融業では三井家です。『日本永代蔵』の「昔は掛算今は当座銀」に登場します。江戸の駿河町に大規模な店舗(越後屋)を構え、「現金売りで掛値なし」という画期的な商法を展開して成功を収める様子が描かれています。幕府は大坂のお金を江戸に送金する必要があり、送金にも三井が大活躍します。1691年、三井は幕府から大阪御金蔵銀御為

替御用を命じられます。公金を江戸に送る業務で、大坂両替店を開きます。三井は集まったこの公金を融資に回し、莫大な利益を得ました。

米国の歴史学者、南カリフォルニア大学のジョン・ウェルズが書いた『1688年 パロックの世界史像』に『日本永代蔵』が出てきます。1688年はイギリスの名誉革命の年ですが、この年に世界で何が起きたか、全地球規模で描いています。『日

本永代蔵』は、貨幣経済、都市化の中で登場した人間精神を描いている」と絶賛しています。

元禄に大阪で文芸の花が開いたのはこうした社会的・経済的背景があつてのことだと思えます。その中から大坂は近松門左衛門、竹本義太夫(1651-1714)、坂田藤十郎(1647-1709)といった人材を輩出し、応援する庶民が誕生し、歌舞伎・浄瑠璃の黄金期を迎えることになりました。

上町台地の美術と風景

Lecture : Fine Art and Scenery of Uemachi Hills

講演

橋爪 節也

Setsuya Hashidume

(大阪大学名誉教授 前大阪大学総合学術博物館長)

Lecturer, Professor Emeritus, The University of Osaka

橋爪：上町台地を語るうえで、今の万博にちなんで申し上げると、第5回内国勧業博覧会が重要で、これが日本における最初の万博だといわれている。明治36年に今の天王寺公園で開催され、153日間で530万人が来場された。

なぜこれが日本初の万国博かというと、このときに日本がパリ条約を締結。パリ条約とは、海外の博覧会に出品したものは、特許などもあるから、博覧会が終わったら返却する。パリ条約に入ったので、内国博としているが、ドイツやアメリカなど13か国から出品があった。大阪の人の成功体験はここにある、これが70年の万博につながる。70年万博の成功体験が現在につながっているのではないかと私は読んでいる。

船場や島之内もそうだと思うが、水都大阪は「八十島」と呼ばれ、島だらけであった。これ

をどう考えるか。仮に大阪諸島と名付けて、大阪諸島は大阪アイランドであると考えてみると、島には島固有の生態系がある。

中之島は蔵屋敷という独特の文化的生態を持ったところである。堂島は米市、船場は商人のまちとしての生態系があり、島之内はちょっと違う感じ。ミナミに行くと道頓堀、新町には遊郭がある。独特の生態系があるとみた方がわかりやすいのではないか。そういう見方をしていきたい。



大阪諸島で島固有の生態系があって、上町台地は丘陵なので鎮守の森的なものだという見方ができるのではないかな。歴史軸と空間軸、高低差、生活、上町台地の東と西の違いなど、様々な切り口がある。

船場の画家について、ひと言で船場といっても違うのではないかな。船場をそれぞれネックやサーロインなどの部位に分けると、薬の道修町があり、久宝寺は小間物のまちで、御堂さんのあたりは仏教関係がある。実はこのように見るべきではないかな。全体としては商業のまちではあるが、違うという見方をすればよいのではないかな。

上町台地の地域的な性格分けで、宗教ゾーン、歴史ゾーン、幕府関係(大阪城)、近現代の官庁ゾーン、空堀は生活ゾーン、上町という下町、織田作之助もそう言っている。病院ゾーンかもしれない。国立大阪病院、日本赤十字病院、警察病院など、病院が多い。

上町台地もこのように分解してみるとおもしろいのではないかな。次に出てくるのが大阪人の様々な切り口で、「描かれた大阪(大坂)」、絵画化された大阪と考える。一つの切り口として古い時代は名所絵的なもの、「摂津名所図会」など、名所を描いている。

近代においては遊歩者(フラヌール)の目線、

発見される風景という視点がある。フラヌールはフランス語で、目的もなくブラブラ歩き回る人、仕事をしない人。それ以前は目的を持って行っていた。銀座をブラブラするから銀ブラ、大阪では心ブラ、道頓堀をブラブラする道ブラ、平野町は平ブラ、これが3大ブラ。近代においてはフラヌール的な目線が発生してくるから上町台地ブラもあると思う。江戸時代にあったかどうかはわからないが、現在の歴史散策はフラヌール的な世界ではないかな。

古典文学の場合は俊徳丸、能の「弱法師」、あるいは文楽の「摂州合邦辻」で上町台地が出てくる。これをもってブラといえるかというところではない。近現代の文学になるとフラヌール、風景を発見する。近代人はブラをすることにより風景を発見し、違う価値観を見いだすのではないかな。見上げる風景、見下ろす風景、坂(天王寺七坂)、高台、船場・島之内との関係性、織田作之助の著書「木の都」が出てくる。

西鶴と上町台地については、一つは生国魂神社で「俳諧大矢数」、万句俳諧の興行。西鶴に会いたくなったら生國魂神社に西鶴の像があり、すぐ近くに織田作之助の像もある。西鶴のお墓は上町の誓願寺にあり、記念碑「井原西鶴終焉の地」は谷町四丁目にある。鎗屋町界限で死んだことがわかっている。

元禄から享保の時期は歴史的には町衆から町人へと変化した時期である。どう違うのか。町衆は桃山時代の豪商で、町人はコツコツお金を稼ぐ商売人。町衆から町人に変化し、ここから大阪が盛んになる。

これを象徴しているのが、享保元年(1716年)

海外の出品
カナダ館



に町衆を代表する尾形光琳が没した年に、町人文化を代表する与謝蕪村、伊藤若冲が生まれた。要するに町衆は桃山時代に堺の商人が自分たちで武装する。織田信長と戦争をしてもよいと、京都の町衆も自衛する。上京と下京、武力を持ちお金も持っている。尾形光琳の絵は王朝文学、和歌的な世界。ところが、享保になると、コツコツ型の商人はいくつかのタイプに分かれる。丸山応挙の写生画は教養がなくてもリアルだからすぐにわかる。そうではなくて、この時代は漢文学、中国の古典、漢学を勉強することが必要な文人画が生まれた。中国趣味のインテリの絵画と、ワンちゃんかわいが出てくる。これが町人の文化。その切れ目がこのあたりにあった。

尾形光琳の後、大阪は町人的な文化が強烈に開花し、木村兼葭堂などが出てくる。元禄は過渡的なところでわかりにくいところがある。

西鶴と上町台地、近代文化をあえて結びつけるとしたら、織田作之助が『西鶴新論』で、「西鶴は大阪の人で、大阪に生まれ、大阪で育ち、大阪で書き、大阪で死に、その墓も大阪にある」と書いている。大阪が6つも出てくる。織田作之助が西鶴を発見する。

「もう元禄の昔より大阪町人の自由な下町のおいがむんむん漂っていた。上町の私たちは下町の子として育ってきたのである。そこは俗に上町と呼ばれる一角で、上町に育った私たちは、船場、島之内、千日前に行くことを「下に行く」というていたが、しかし俗にいう下町に対する意味での上町ではなかった。高台にある町ゆえに上町と呼ばれたまでで、ここには東京の山の手といったような意味も趣もなかった。」

この時代のものは少なくて、湯木美術館所蔵の「浪華名所図屏風」は大阪市の指定文化財になっている。これは四天王寺が大きく描かれている。四天王寺と道頓堀の芝居小屋の近さ注目される。「摂州大坂大絵図」(1697年大阪歴史博物館蔵)もおもしろくて、この年代から大阪は次の発展をする。四天王寺が大きく描かれて賑わっている。ここは寺島の瓦を焼く場所、ここは空堀。よい地図である。

幕末になると「浪花百景」がある。これは3人の画家が合作したものである。原寸復刻したもので非常に色がきれいである。浪花百景は必ずしもその時代を描いたものではない。上町台地関係の図は約26ある。版画なので刷りによって色が違う。私が出した本「浪速百景集成」は一番きれいで初刷りに近い。



上町台地に対する目線を考えるときに、近代においてはフラヌール、ウロウロして発見する、発見型である。織田一麿が大正年間、「大阪二十景」を描いている。石版画で有名な人で、初代通天閣の天井画の原画が残っていたので、それをもとに現在の通天閣ができた。ただし、脚の形が違うから調整している。織田一麿は四天王寺の東門で雨宿りをしている人を描いている。フラヌールのそれを発見したのだと思う。雨宿りの絵は昔から

あるが、この版画シリーズ自体、全体がそういうものであった。茶臼山での釣り。こちらの茶臼山は幕末の浪花百景。これは高津、こちらは浪花百景の高津、高津の高台では展望がよくて、遠眼鏡

を貸してお金を取る。イモリの黒焼き屋から見上げた高津、織田一鷹はフラヌールの下から見上げています。いかに発見するか。これも大きなテーマとしてあるのではないかと。

座 論

座 論

吉野 国夫

Kunio Yoshino
(当財団常務理事 事務局長)

吉野：橋爪先生から非常におもしろい切り口でお話をいただき、大変勉強になった。ここから約1時間、文芸的なことに関して美術も含め、皆さんとやり取りをしながらサロンの進めてまいりたい。私は進行役で、本日は知識のある方がお集まりなので、意見や質問があれば積極的に発言していただきたい。

宇澤さんは、経済も含めた近世の全体的な社会背景について急ぎ足で話してくれました。橋爪先生は、美術の話の前に重要なキーワードで「文化複合体」という概念を示された。大阪を一つの文化的生態系という観点からみると、上町台地を鎮守の森と表現された。もう一つは桃山時代から江戸中期に至る「町衆から町人へ」、これも大きな転換点である。町衆の時代は、まさに戦国時代の末期、蓮如や秀吉による新しい時代が到来する。人口が増えるとともに技術革新がすすむ。淀屋は日本だけで発想したのではなく、キリシタンからの情報をどん欲に吸収し、ベルギーのフランドルやアントワープの為替・証券取引制度など、国際的な経済システムを吸収して米市場を創造したのではないかと。織田信

長の頃から、特に大阪にはキリシタン大名として知られる高山右近もいる土地柄で、先進知識や技術的背景もあって経済的な革新が起こったといわれている。

橋爪先生は「享保」という時代を転換点として、江戸時代の美術が変わったとされた。

もう一つ大きなキーワードは「フラヌール」、ブラブラ遊んでいて生産性がないように思えるが、これが非常に重要である。上町台地は散歩をするのにとってもよい場所なので、ブラブラと歩いて上町台地ブラを楽しんで頂きたい。

江戸時代、お城に勤めていた侍は少なく、彼らは暇だったからまさにフラヌール、参詣を名目に1日かけて上町台地を巡り歩いたそうだと。一心寺の高口さんは武士のフラヌールを追いかけて博士論文を書かれた。その頃から上町台地をブラブラ歩く人がいて、その後の行楽地の先駆けとなったのではないかと。

では、ここで関西経済同友会の廣瀬常任幹事からコメントを頂きたい。

廣瀬：最近では万博で多くの外国人が来られているが、東京以外は初めてという人が多い。フラ



ンスの方に関西はどんなところかと聞かれたので、東京は400年の歴史であるが、大阪は1800年、2000年の歴史がある。そういう話をしたら尊敬のまなざしに変わった。今後、どこまで彼らをつかめるかと考えると、歴史を知っていなければ話にならない。

近代の歴史だけでもこれだけおもしろい。古代からなどもっと長い目で見れば、実に多くの人たちがここで営み、その蓄積が我々の起点になっている事が分かる。もっと勉強しなければと思った。

吉野：お二方に言い足りなかったことや話題に出たことも含めて追加トークをお願いしたい。大阪には鴻池や住友といった豪商が近世に出ているが、幕末の大阪で最も資産を持っていたのは広岡家で、鴻池の倍ほど持っていたというデータがある。宇澤様如何でしょう。

宇澤：吉野さんから広岡家の話が出ましたが、関西・大阪21世紀協会が企画した『なにわ大阪をつくった100人』で広岡家(加島屋)を担当しました。広岡家が有名になったのは2015年の

NHKの朝ドラ「あさが来た」です。大同生命の創業家です。1730年に幕府が初めて堂島米市場を公認しますが、「米年寄」には広岡家4代吉信が選ばれました。幕府が堂島米市場を公認したのは深刻な財政難を打開するため、変動の激しい米価をコントロールするのが目的でした。

17世紀は豪商が次々と出てきましたが、大名貸などで相次ぎ倒れます。三井高平の聞き書き『町人後見録』に書かれています。広岡家は過去の豪商の失敗を教訓にして藩の懐に入り込みます。いまでいう個人相手のリテールバンキングではなく、ホールセールバンキングです。彼らのビジネスは米や特産品をいつどのタイミングでマーケットに出すか、運用を一手に引き受けて生き延びたと言えます。

吉野：今日のテーマである近世といっても、享保のあたりで大転換が起きている。金融の世界でも、大阪の銀をベースにした銀遣いの経済と江戸の金、幕府は何とかその力を削ぎたい。全国統一の金融システムに組み入れられた。そのあたりから美術も大阪町人への転換がでてきた

のではと想像します。

橋爪：大坂の陣の後に幕府によって復興という話で思い出したことがある。今年は大阪市の第2次市域拡張で大大阪になってちょうど100年の年である。大大阪をつくったと言われる市長は、池上四郎と池上四郎がマネをした關一である。池上四郎は会津の出身で、もう少し年がいったら白虎隊に参加していた。關一は静岡の出身で、徳川慶喜が大政奉還後に静岡に蟄居するときについていた旗本の子どもである。つまり、近代の大大阪をつくった2人は旧幕府の人である。何かある。大坂の陣が続いているのではないか。大阪は案外そういうまちではないかと思うことがある。

享保のあたりで美術も変わってくる。一つは、大阪には出版文化があったので、絵師の大岡春トや橋守国が描いた絵手本がたくさん出版される。その後に出てくるのは文人画、大阪は文人画で、中国の漢籍などを勉強した人の系統のものがある。



近世・江戸時代のフラヌールの見本を見せる。浪花百景は1枚ずつ独立しているが、この2点だけはつなげると物語が発生する。天満橋風景は天満橋の上である。これは寢屋川で、こちらは大阪城。これは網島の風景、こちらに行くと桜ノ宮、桜が咲いている。これは天満橋で、左の人は代官のよ

うな帽子をかぶり、若侍と歩いている。これはきっと花見の帰りで、橋の上で指をさしている。こちらから来たのか。午前中、ちゃんと仕事をしろと言って、自分たちは遊びにきて、ばったり会ったというシーン。フラヌールの暇な武士。振り返って3人ともこの人を見ている。身につまされないか。橋の上だから逃げられない。この絵はそこにおもしろさがある。今現在、ここはどこかと聞かれたら、この上に天満橋のマーチャンダイズ・マートビルが建っている。

吉野：ありがとうございます。以前、このシリーズで登場いただいた大阪公立大学の名波先生、いかがでしょうか。

名波：私の専門は植物生態学、特に森林樹木の生態学を専門にしており、2年前から交野市にある公立大学附属植物園の園長を務めている。

大阪市は緑の少ない自治体で、政令指定都市の中で緑被率はワースト1である。私も木のない都だと思っていたが、上町台地は大阪市の中でも特別に緑の多いところである。上町台地とかかわりを持ったのは2006年、今から20年近く前に、下寺町のお寺さん、生國魂さん、大江神社など、社寺の植生調査を行ったのが上町台地とのかかわりである。

今日の話でも、近代に入り高いところからまちを見下ろすようになった。あべのハルカスから北を見ると、大江神社から生國魂さんにかけて、松屋町、下寺町とずっと緑のベルトが続いている。大阪市の中でも上町台地は例外的に緑の多い地域であり、植生調査をすると、まちの中に大きな木があり、原生的な森に行かないとみられないような樹木や、都市公園では見られ

ない樹木が残っていたりする。

吉野：緑という観点から、上町台地は鎮守の森だという話があった。江戸期の観光案内マップを見ると、お寺や神社がたくさんあるだけではなく、桃や梅の名所があり、行楽地であったことがわかる。桃を植えて桃谷というように、上町台地には花の名所がたくさんあった。寺社めぐりと合わせて行楽地として花めぐりがあった。そういう意味では絵になりやすい。

橋爪：浪花百景を見ると、これは近鉄上本町駅の東のあたりで、これは産湯だから北側、花の名所である。梅屋敷もあって大阪は花の名所である。行楽という点では、西照庵という料亭があり、こちらは、料亭のうかむ瀬で、上町台地、夕陽丘の高台にあった。

これは天保山のみおつくしを夕陽丘の料亭から見ている図で、これは明石海峡。木々が紅葉しているので、花に名所が近くにあったのではないか。上町台地系を集めているが、桜ノ宮方面など、サクラの花はたくさん出てくる。

吉野：橋爪先生の解説を聞いていると、すべての絵がおもしろく、大変勉強になる。

元21世紀協会専務理事の佐々木さんが来られているので、ひと言いかげでしょうか。

佐々木：楽しいお話で大変勉強になった。「町衆から町人へ」というキーワードで、若冲が京都で焼け出され、大阪の大商人である木村兼葭堂が彼を引き受けてかくまった。これは町人の部分。サントリーの鳥井信一郎社長が関西経済同友会の都市問題委員会で提言書を出された。それは町衆共和国関西(United Cities of KANSAI)で、文学が大阪を支えてきた。町衆

や町人が文学を支えるという意味で、普段から漠然と町衆や町人を使っているが、違う気づきを与えてもらった。

橋爪：町衆は桃山時代の堺の豪商、カネと武力と教養を持っている。豪奢というか豪華絢爛。本阿弥光悦や俵屋宗達など、風神雷神図のようなイメージ。町人は薄利多売、コツコツ型で贅沢はしない。木村兼葭堂など、大阪商人の家訓の中には、自分がこれだけコレクションしたのは贅沢をしているからではない。豪商タイプは破滅したりヤンチャをしたりする。あるいは政治的に破滅するかもしれない。文人画は教養がいる。なぜなら、李白の詩の情景が描かれていたら、李白の漢詩を知っていなければならない。ワンちゃんかわいいという人にはわからない。大阪は文人画が多かったので、なにわインテリという流れが生まれてくる。それが現代の商人にあるかどうかはわからない。教養のあり方として、お金があれば美術品を買ってほしい。美術関係者として、一時期、大阪の画廊が東京に行ったが、購入して文化を支える。お金を使わないと難しいと思ったりもする。

吉野：そういう意味で、現代の町人が目指しているのは関西経済同友会の芸術文化委員会ではないか。経済界で芸術文化を本格的にやっているところは東京にもないので、東京都歴史文化財団の人が来られた際に大いに自慢した記憶がある。久保さんは久保惣美術館のオーナーで、そういう人が経済界の中で芸術文化をやっておられる。

久保：私もコツコツ型の一人である。ご紹介のあった芸術文化委員会の委員長を拝命しているが、大阪・関西は文化・芸術の人たちが集まってくれる。

経済と文化は両輪である。これがベースの考え方で、文化のないところに経済は発展しないし、経済のないところに文化は発展しないから、両輪で回していく。上方文化も研究しながら、大大阪といわれた時代、当時の大阪は紡績で潤っていたが、そういうところも大阪として発見する必要があるのではないかな。

浪花八景も和泉市久保惣記念美術館で所蔵しており、江戸名所百景と浪花名所百景ということで比較展示もしている。浮世絵もたくさんあるので、ぜひご高覧いただきたい。

吉野：同友会の話題が出たが、久保さんの前任の委員長は滋慶学園の浮舟総長さんで、滋慶学園のすごいところは、シンフォニーホールが一般に売却される時、あのホールがなくなるのはしのびないからと買われて経営されている。文化施設も、お金を垂れ流すのではなく収支が取れるようにする。それを実現されているので尊敬している。今日は音楽家でジュリアード出身の喜多さんが来られているので、ひと言いただきたい。

喜多：文化・芸術の話で大阪は何がすごいのか。東京の大企業はでっかい爆弾を落として一回のスポンサーが何億円、海外のオーケストラを呼んだりしているから目立っているが、例えば久保さんの会社は、若いアーティストを育てるために関西フィルと協力してヤングアーティストを応援する企画をされたり、そういう会社があるのに、なにわ人の奥ゆかしさで、なかなか表に出てこられません。

社員の名刺に滋慶グループのロゴが入っていないのはザ・シンフォニーホールだけである。誰が経営しているかは関係ない。それよりもシ

ンフォニーホールが考えていることが大事である。ロゴを外して名前も変えずに運営している。コロナでずいぶん傷ついたが、やっと人も戻ってきた。ぜひご来場ください。

吉野：最後に橋爪先生からひと言。

橋爪：寺町には先人のお墓があって、西鶴だけでなく近松門左衛門のお墓もある。江戸時代の先人のお墓を回るだけでも知識になる。また、関西文化経済倶楽部という勉強会を立ち上げているので、入っていただけるとうれしい。このほど、私の最新著作「大大阪と画家たち」では画家の菅楯彦も書いているが、菅楯彦は天王寺の雅亮会の会員で天王寺舞楽の会長でもあった。

吉野：今日は、近世美術の権威である橋爪先生をお招きし、美術を通して社会や経済、文化など、幅広く議論ができた。それらが密接に絡みながら「町衆から町人」、町人のまち大阪が浮かび上がってきたのではないかな。結論には至らなかったが、私個人としてはフラヌール、ブラブラと歩いて発見する。芸術家であったり無職の人であったり、そういった人たちの重要性を指摘したい。皆さんも、仕事も大事ではあるが、ぜひ生活の中にフラヌールを取り入れていただきたいということで、締めくくりたいと思います。

閉会挨拶：（略）

和宗総本山四天王寺

執事参詣部長 総務部長 山岡 武明

閉会

以上

※本報告は事務局の責任において要約編集したものです

芸術さろん@てらまちⅣ

近世上町台地の風景と文芸

2025年5月

主催 上町台地アートプロジェクト実行委員会
(事務局・一般財団法人 大阪地域振興調査会)

共催 和宗総本山四天王寺

後援 関西経済同友会 大阪商工会議所

協力 野杵育郎(なにわ名物開発研究会会長)

大江連合振興町会

近鉄グループホールディングス株式会社

サントリーホールディングス株式会社 他

